

あきたで生きる

東北農政局秋田県拠点

令和6年度版

MAFF
農林水産省

「あきたで生きる」とは？

生きるには、農林水産業を生業とし、暮らし、生き生きする、仲間を作る、効果を現すという意味が込められています。そのような秋田で生きる人々に焦点を当て、秋田の地域資源を活用しながら生き生きと暮らし、地域資源を活用することでヒトやモノ・コトの価値が発揮され、秋田を活かすような取組について、令和5年3月から東北農政局秋田県拠点のWEBサイトで紹介しています。

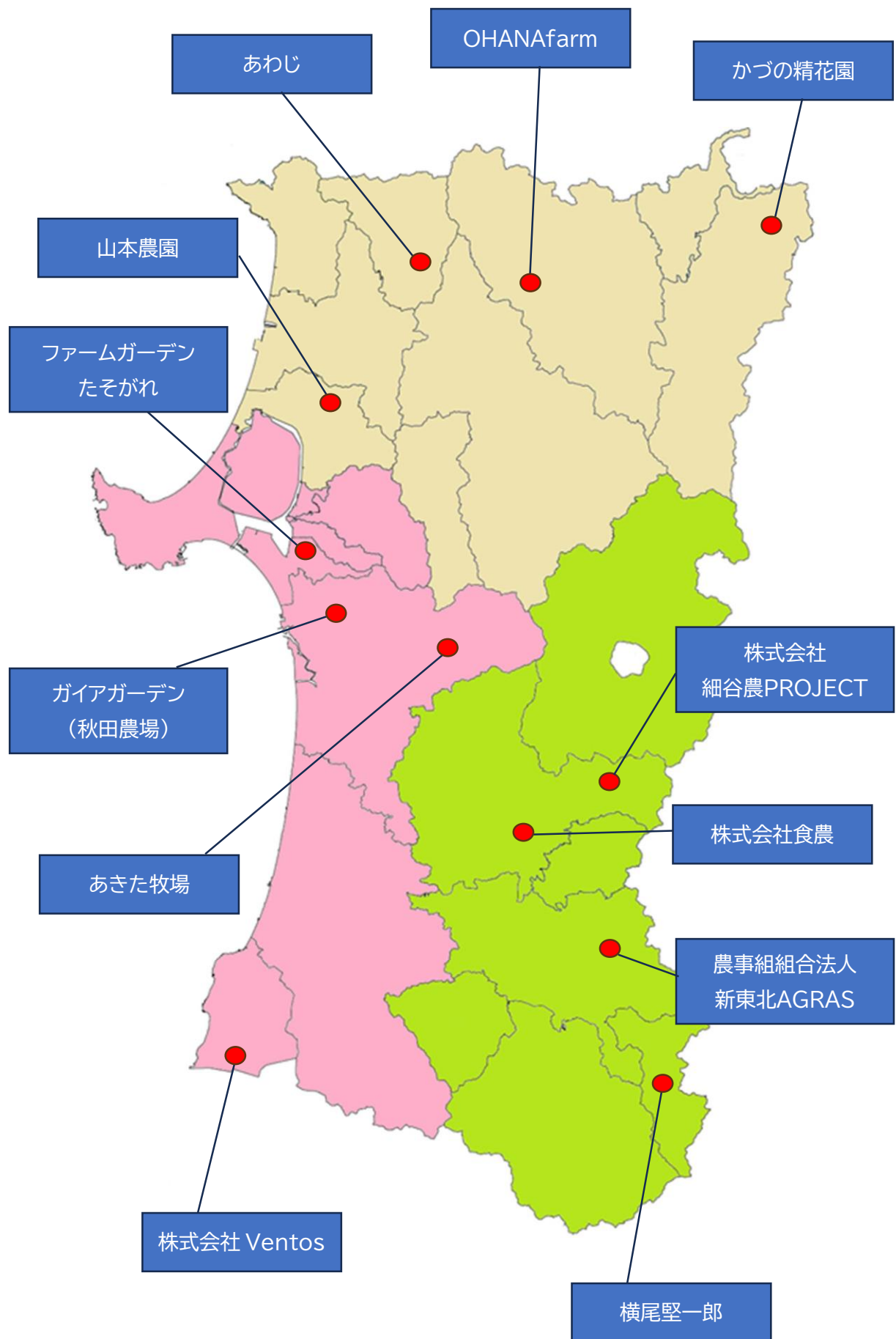
令和6年度に紹介した取組を1冊にまとめました。



あきたで生きる

令和 6 年度

令和 6 年 4 月	あきた牧場（秋田市） 若き牧場主、羊とうさぎで秋田を盛り上げる	…… 1
5 月	あわじ（山本郡藤里町） 関係人口を創出して農村の活性化にチャレンジ！	…… 2
6 月	横尾堅一郎（雄勝郡東成瀬村） トルコギキョウで若手農家を増やしたい！	…… 3
7 月	ガイアガーデン（秋田農場）（秋田市） こだわりの土づくりで美味しい野菜を周年栽培	…… 4
8 月	かつの精果園（鹿角市） 鹿角から自慢のブルーベリーを届けます！	…… 5
9 月	株式会社食農（大仙市払田） スマート農業を実践し地域の農業を守っていく！	…… 6
10 月	ファームガーデンたそがれ（潟上市） 「たそがれ野育園」で農業ファンの裾野広げる	…… 7
11 月	OHANAfarm（大館市） うんめえ野菜をみなさんへ届けたい！	…… 8
12 月	株式会社細谷農 PROJECT（大仙市清水） トマトで地域に活気を与え、より良い産地を目指す！	…… 9
令和 7 年 1 月	株式会社 Ventos（にかほ市） にかほ市横岡集落から田舎の魅力を発信中！	…… 10
2 月	山本農園（山本郡三種町） 半農半Xを目指す若手経営者、現在奮闘中！	…… 11
3 月	農事組合法人新東北AGRAS（横手市横手） 横手の担い手として、農業の発展に尽力！	…… 12



若き牧場主、羊とうさぎで秋田を盛り上げる

あきたで生きる～秋田の地域資源を活用し、秋田で暮らし、秋田を活かす取組～



あきた牧場
(秋田市)

代表 武藤 達未



あきた牧場

経営概況

飼養頭数 | 羊: 80 頭、うさぎ: 200 羽、山羊: 17 頭

施設等 | 畜舎2棟、放牧地2ha

構成員 | 2名

販売先 | 飲食店等

北海道からやって来た一人の若者が、自然豊かな秋田市河辺岩見に新しい牧場をつくりました。秋田に羊を根付かせたいと奮闘していた武藤さんは、秋田で生まれたジャンボうさぎの生産が少なくなっていることを知り、「羊とうさぎで秋田を盛り上げたい。」との思いから、自身の牧場で一生懸命育てています。

▶ きっかけ

北海道で羊牧場を経営する家庭で育った武藤さんは、大学進学のため秋田に来ました。大学4年生の時、羊の毛刈りから作品づくりまで行う「つむぎサークル」を設立したことをきっかけに、「秋田で羊を育てたい。」と思うようになりました。



●「つむぎサークル」で制作した作品

大学を卒業後、大仙市の農場に就職し飼育のノウハウを学んでいた時、「ジャンボうさぎ(日本白色種の秋田改良種)」に出会い、このうさぎが僅かしか飼育されていないことを知りました。

「羊とうさぎで秋田を盛り上げたい。」との思いから、令和3年6月に武藤さんは、秋田市に「あきた牧場」を立ち上げました。

▶ 取組

牧場の場所は、大学生時代に虫や魚の生態調査のため通った土地勘のある秋田市河辺岩見に定め、農地中

間管理機構を通じて借りた1haの農地に2棟のビニールハウスを建て、羊とうさぎの食肉生産を目指すことにしました。

牧場設立から3年目となった現在は、羊は成長が早く肉付きが良いサフォーク種や希少種で茶色の柔らかな毛が特徴のマンクス・ロフタン種(委託)など合わせて80頭と、ジャンボうさぎが200羽になり、将来は羊を100頭、うさぎを500羽に増やす計画です。

出荷先は、県内の飲食店が主ですが、今は引き合いが多く注文に応じきれない状況のため、今後供給体制を整え「秋田の駅前で、秋田の羊肉やうさぎ肉が食べられる店を増やしていきたい。」と話します。



●ビニールハウスの畜舎

また、武藤さんの取組に感銘を受けた山田さんが、研修生として昨年と一緒に作業しています。編み物が得意な山田さんは、羊の毛を加工から販売

まで行う羊飼いを目指しているとのこと、武藤さんとは話が合います。



山田さん(左)と武藤さん

▶ これから

繁殖から肥育まで行う武藤さんですが、日本ではマイナーな羊は牛や豚等のメジャーな家畜とは違う悩みがあるそうです。例えば、国内には羊専門の市場が無く、生産も北海道に偏っているため、消費者の国産羊肉に対する認知度が高まりにくい状況です。また、人工授精の技術も海外のように普及しておらず、生産者だけの努力では解決が難しい問題が多くあるそうです。

武藤さんは、「今後は、飼養頭数を増やし、レストランへ直売することや加工場を設置しソーセージなどを製造・販売まで手掛けることにより、新たな羊肉の需要を開拓していきたい。」と、意気込みを語ってくれました。

(●印写真: あきた牧場提供)

関係人口を創出して農村の活性化にチャレンジ！

あきたで生きる～秋田の地域資源を活用し、秋田で暮らし、秋田を活かす取組～



あわじ
(山本郡藤里町)
代表 佐々木 規之(のりゆき)

経営概況

経営形態 | ゲストハウスあわじ商店経営
| ふじさとマイクロファーム経営(10 m²)
| 畑 0.5a、山羊3頭
労働力 | 3名
販売先 | マイクログリーン: 秋田市及び首都圏のレストラン



あわじ商店

佐々木代表は、東京都から深刻な高齢化と人口減少に直面している藤里町に移住し、「ゲストハウスあわじ商店」をオープンして田舎暮らしや農村に興味を持つツアー客を呼び込み、藤里町の魅力を発信しています。加えて近年関心が高まっているマイクログリーンを生産・販売するなど、新しい取組にも挑戦しています。

▶ きっかけ

大館市出身の佐々木代表は、28歳の時に勤めていた会社を退職後、東京都で様々な業種を経験し、現在は、ITに関する事業を個人で立ち上げています。東京での暮らしも約10年が過ぎ、漠然と何か新しい事にチャレンジしたいと考えていた頃、周囲の友人達が自分の生まれ故郷の秋田県についてほとんど認識がなく、その知名度の低さに愕然としました。そこで、秋田県の農村に集える場所を作り、沢山の人を呼び込んで、農村の良さを知ってもらおうと県内への移住を決意しました。移住先として海、山、川などが近く、自然豊かで住居環境も整っている藤里町に決め、高校の同級生と2人で令和4年6月に藤里町大沢地区へ移住しました。



● ゲストハウスあわじ商店

▶ 取組

藤里町に移住して気づいたことは、地域住民が昼でも夜でも気軽に集える場所が少ないことや世界遺産白神山地の麓であるものの、外からの訪問客も少なく賑わいがないことでした。そこで、元店舗兼住居を令和5年7月に改築し、農泊施設「ゲストハウスあわじ商店」としてオープンし、地域住民との交流や季節ごとの田舎暮らし体験のイベントを開催しています。



「ゲストハウスあわじ商店」内の宿泊室

また、農泊経営を下支えするため、ゲストハウスの一室で近年日本でも関心が高まっている※マイクログリーンを生産し、秋田市や首都圏のレストランへ販売を行っています。高評価で口コミ等により注文が増えており、生産拡大したいところですが、生産に手間がか

かり人手も足りていないことが課題とのことでした。



ゲストハウスの一室で育つマイクログリーン

▶ これから

ゲストハウスあわじ商店を拠点に全国各地から人を呼び込み、地域住民との交流を通じて農村における関係人口を増やし、移住に繋がる活動をしていきたいと思っている。また、藤里町は耕作放棄地が増加傾向にあるので、それらの農地を活用して有機農産物の生産にも取り組んでみたいと熱い思いを語っていただきました。

※マイクログリーンとは、発芽して1～3週間くらいの若芽野菜を指し、1種類の野菜を指した言葉ではなく、様々な若芽野菜の総称です。

(● 印写真: あわじ提供)

トルコギキョウで若手農家を増やしたい！

あきたで生きる～秋田の地域資源を活用し、秋田で暮らし、秋田を活かす取組～



横尾 堅一郎(けんいちろう)
(雄勝郡東成瀬村)

経営概況

経営形態	トルコギキョウ ハウス6棟(約 18a)
	冬期間大根の加工・販売(いぶり大根)
労働力	2名(本人、妻)
販売先	JA こまち ネット販売 産直

東成瀬村に移住して、トルコギキョウ栽培を始めた若手農家を紹介します。村で野菜や花きを栽培している若手は、横尾さんを合わせて3人しかいません。横尾さんは花き栽培の仲間を増やすため、苗の自家採取、栽培面積の拡大や農産物加工を行い健全経営の手本となるべく日々奮闘しています。

▶ きっかけ

宮城県出身の横尾さんは、結婚を機に秋田県内に移住しました。トルコギキョウ栽培に取り組むまでは、大潟村で介護保険関係の仕事をしていました。大潟村の若い人達は、当たり前のように農業を継いでおり、その姿に身近に触れたことや東成瀬村でリンドウ栽培を営む妻の両親への思いもあり、自分も農業をやってみたいという気持ちが強くなりました。

秋田県の「令和2年度未来農業フロンティア育成研修花きコース」に応募し、秋田市の農業試験場、羽後町三輪地区の現地研修を経て、令和4年3月に就農しました。



定植後のハウス内

▶ 取組

国の「就農準備資金」、「経営開始資金」及び「経営発展支援事業」や秋田県の「農業夢プラン応援事業」を活用し、妻と2人でハウス2棟(6a)からトルコギキョウ栽培を始めました。

トルコギキョウを選択した理由は、国の支援事業の要件から、両親が営んでいるリンドウと違う品目で、冠婚葬祭全般に用いられ、年間を通した需要があるからです。

また、苗の定植から収穫までの期間が3ヶ月であるため、栽培面積を増やしても、ハウスごとに栽培サイクルをずらし、収穫時期が重ならないよう作業計画を調整すれば栽培可能となることから決めました。



1棟ごとに複数の品種を作付け

トルコギキョウは、花を大きくしっかり育てることが重要で、手間をかけるほど良品比率が向上し、それが単価に直結するので作り甲斐があります。令和5年にハウス2棟、さらに令和6年にハウス2棟を増設し、栽培面積を拡大しました。

▶ これから

現在は苗を購入していますが、苗の良否で良品比率が増減することと経費面を考え、自家育苗を検討しています。



主力品種の「セレブリッチホワイ」

栽培面積の拡大にあたっては、所属している JA こまち花き部会(会員数30名)のトルコギキョウ 500 品種の栽培している中で収益に結び付く定番や売れ筋の組合せ情報を参考にしていきたいとのことでした。

また、農産物加工所を設立し、冬期間はいぶり大根等漬物の製造を中心に取り組み、経営の安定化を考えています。



ピンク系の代表品種「セレブピンク中生」

こだわりの土づくりで美味しい野菜を周年栽培

あきたで生きる～秋田の地域資源を活用し、秋田で暮らし、秋田を活かす取組～



ガイアガーデン(秋田農場)
(秋田市)

代表 菅原 雄(すがわら ゆう)

経営概況

経営面積 | 露地: 畑8a、施設: ハウス 15 棟
作物 | えだまめ、ケール、ミニトマトなど
年間 50 品目
構 成 員 | 2名ほかアルバイト数名
販 売 先 | 直売所や県内の小売事業者、
飲食店、通販ほか



ガイアガーデン Instagram



ガイアガーデン facebook

秋田市郊外にある農場の農業用ハウスと露地で、多品目野菜の周年栽培に取り組む認定農業者がいます。こだわりの土づくりで作物にとって生育しやすい環境を整え、美味しい野菜づくりに励んでいます。毎日、午前中に収穫した野菜を販売先の直売所や小売事業者等へ自ら納品し、新鮮な野菜を消費者の皆さんへ届けています。

▶ きっかけ

菅原さんは、秋田県立農業短期大学を卒業後、他業種に 15 年間勤務していましたが、農業に携わる人がどんどん減っていく状況から、自分にもチャンスがあるのではと思い、平成 26 年 4 月に就農しました。翌年に、秋田市郊外の農地を借り受け、「ガイアガーデン(秋田農場)」を設立しました。比較的住宅街に近く、都市近郊型の農業経営が可能な環境に魅力を感じたそうです。



ビニールハウスの様子

▶ 取組

「土づくりがしっかり出来ていれば、どんな野菜も高品質に作ることが出来る。」と考え、こだわりの土づくりをしています。地域で豊富にある籾殻や米ぬかなどの天然資材を活用した植物性堆肥と、米ぬかや大豆粕で作ったボカシ肥料を中心に施用し、土壌微

生物を活性化させ、作物にとって生育しやすい土壌環境を整えています。

日々変わる天候と野菜の生育状況を見て、肥料の量やタイミングなど使い方を意識して、「トライ&エラー」を繰り返しながら野菜作りをしているそうです。

直売所や小売事業者などへの直接販売に対応するため、少量多品目の野菜を栽培し他の農家との差別化を図っています。



小さい子供に人気の真っ赤なミニトマト

また、日頃から秋田市園芸振興センターなどの研修生の受け入れや市民向けの野菜の栽培指導など、担い手育成や農業の普及に関わっています。

さらに農業ファンの裾野を広げるため、幼稚園児や近隣の住民などを対象にした収穫体験を開催しており、特に参加した子供たちには「美味しい野菜を知って欲しい。」との思いを持って取り組んでいるそうです。



一年を通して出荷されるケール

▶ これから

「目で見ただけの情報はすぐに忘れるが、五感で味わった体験はずっと残る。」との思いから、栽培情報を SNS などで発信するだけでなく、消費者の方から農場に足を運んでもらい、収穫など可能な限り農業を体験して欲しいと考えているそうです。これからも農業体験の受け入れと、土づくりにこだわった美味しい野菜を食卓に届けたいと話されていました。



左から学生アルバイトの兵藤さん、菅原さん、社員の金澤さん

鹿角から自慢のブルーベリーを届けます！

あきたで生きる～秋田の地域資源を活用し、秋田で暮らし、秋田を活かす取組～



かづの精果園
(鹿角市)

代表 田淵 博之



かづの精果園

経営概況

経営面積 | 畑 1.4ha/ハウス1棟

作物 | ブルーベリー

労働力 | 3名(本人、社員1名、常勤パート1名)
(季節アルバイト 15名程度)

販売先 | ECサイト、飲食店、菓子店等

田淵 博之さんは、かづの精果園のブルーベリーの美味しさに魅了され、平成 24 年に鹿角市に移住し就農しました。平成 30 年に事業継承し、現在はブルーベリーの摘み取り体験、冷凍ブルーベリーやブルーベリージャムの通年販売等を行い、自身が魅せられた美味しいブルーベリーを届けるために日々勤しんでいます。

きっかけ

奈良県出身の田淵さんは、大阪の大学で学び、東京でソフトウェア開発の営業職に就いていた時、仕事からのプレッシャーで体調を崩してしまいました。湯治のため鹿角市を訪れた際に「ネット販売に興味を持っている人がいる。」と、かづの精果園の前経営者を紹介されました。田淵さんは、かづの精果園のブルーベリーの美味しさに感動するとともに、自分の仕事経験をいかし、たくさんの人に味わってもらいたいという気持ちが湧いてきました。はじめは、東京と鹿角市を行き来しながらインターネット販売のお手伝いから携わり、平成24年には勤めていた会社を辞め、移住し就農しました。そして平成30年に、前経営者からかづの精果園のバトンを引き継ぎました。



●上空から見た「かづの精果園」

取組



ブルーベリー畑での摘み取り体験

栽培期間中に農薬を使用しない自慢のブルーベリーは、毎年7月中旬から8月上旬に摘み取り体験を開催しています。また、冷凍ブルーベリーやブルーベリージャムに加工して年間を通してECサイトで販売するほか、飲食店や菓子店へ販売しています。

ここ数年、販売額が伸び悩んでいることから、「観光農園でのインバウンドの受け入れや自社のホームページでの販売、更には商談会への参加などブルーベリーを余すことなく利益に繋がるような地道な営業活動をしていきたいし、今は、物価高で生産コストも上昇しているが、品質を落とすようなことは絶対にしない。この信念を曲げてしまえば、自分が生産している意味がない。」と熱い思いを語っていただきました。



暑い中、手作業でのブルーベリーの選別作業

これから

今は、経営の安定が最優先事項。将来的には、冷凍ブルーベリーの販路に、桃やいちごの冷凍カットフルーツを追加するほか、自社製造によるチョコレートやアイスクリームを企画してみたいと今後の展望を話していただきました。



●自慢のブルーベリー

(●印写真: かづの精果園提供)

スマート農業を実践し地域の農業を守っていく！

あきたで生きる～秋田の地域資源を活用し、秋田で暮らし、秋田を活かす取組～



株式会社 食農
(大仙市払田)
代表取締役 土井 文智(ふみとも)

経営概況

経営形態 | 水稻: 39ha
| 大豆: 14ha、作業受託 20ha
| アスパラガス: ハウス7棟
構成員 | 役員1名 社員1名 臨時雇用3名
販売先 | JA
無人ヘリ「株式会社アグリスカイ仙北」取締役兼オペレーター

高校卒業と同時に就農した土井文智さんは、スマート農業の実証試験などへ積極的に協力し、自らも無人トラクターや直進アシスト田植機などスマート農業を導入し先進的な農業に取り組んでいます。また、仲間と無人ヘリの会社を立ち上げ、旧仙北町全域のほ場の防除作業等を一手に引き受けるなど、地域農業を担っています。

▶ きっかけ

地元の農家に生まれ育った文智さんは、父親から農業継承を言われ続けていたため、当時、周囲で就農する同級生はいませんでした。自身は農業以外の選択肢はなかったとのことでした。



ドローンで直播した実証田

▶ 取組

就農後から徐々に経営面積を増やし、経営を安定させるため「株式会社食農」を設立しました。当初は様々な取組にチャレンジしてきましたが、現在は稲作、大豆にアスパラガス栽培の複合経営を行っています。

大豆は栽培技術の確立に努め、昨年、「種苗交換会(秋田県の農業の祭典)」へ出展し、品質等が評価され、最高位の農林水産大臣賞を受賞しました。

農作業の省力化を図るため、地域でいち早く無人トラクターや直進アシスト田植機などスマート農業を取り入れ、先進的な取組を行っています。無人トラクターは1人で2台操作できるため、作業効率が上がり収益向上に繋がっています。

また、大仙市と秋田県立大学のスマート農業用機械を活用した省力農業の実証試験にほ場を提供するなど協力を惜しみません。



無人トラクターと土井代表

文智さんは、近隣の農家5名で無人ヘリ防除の「株式会社アグリスカイ仙北」を立ち上げ、無人ヘリ5台、ドローン1台で旧仙北町全域(約 1,900ha)の防除のほか、依頼があれば直播、追肥等も引き受けています。

今年大仙市から、先進的な取組や地域のリーダーとしての活躍が認めら

れ、将来の農林水産業を担うことが期待される若手を表彰する「大仙農業元気賞」を受賞しました。



直進アシスト付き田植機

▶ これから

払田地域では、今後 10 年で離農者も増えると想定しており、耕作放棄地にならないよう地域の農業を守っていく考えです。そのため 100ha までの規模拡大に備えた施設も検討していきたいと話してくれました。



アスパラガスのハウス

「たそがれ野育園」で農業ファンの裾野広げる

あきたで生きる～秋田の地域資源を活用し、秋田で暮らし、秋田を活かす取組～



ファームガーデンたそがれ
(潟上市)

園主 菊地 晃生 (こうせい)
菊地 みちる



ファームガーデンたそがれ HP

経営概況

経営面積 | 田: 290a、畑: 60a

作 物 | 水稻、大豆、枝豆、かぼちゃ、里芋
大根、あずきなど年間約 60 品目

構 成 員 | 2名

販 売 先 | 直販、通信販売



ファームガーデンたそがれ FB

潟上市郊外の農場で、多品目野菜の周年栽培に取り組む認定農業者がいます。農薬、化学肥料を使わない栽培と自主販路の確立を目指し励んでいます。また、農作業をしたことがない人や農地、農機具を保有していない人の自然農法を通じたコミュニティづくりとして「たそがれ野育園」を開園し交流する場をつくっています。

▶ きっかけ

菊地さんは、平成 19 年にそれまで暮らしていた北海道から帰郷し、祖父の田畑を受け継いで就農しました。翌年には、自分が好きな情景をイメージして、農場を「ファームガーデンたそがれ」と名付けました。

就農時、米づくりで使用する農薬と化学肥料の多さに驚き、自然農法(無農薬、無化学肥料栽培)を始めたところ、5年目に虫が舞い始め、自然が戻ってきたことを実感しました。この活動を広げたいと思い、平成 26 年に持続的で再生可能な農法を通じたコミュニケーションの場として「たそがれ野育園」を開園しました。



●たそがれ野育園で農作業体験をする子供たち

▶ 取組

園では、種まきから収穫まで一貫した農作業を体験してもらいますが、参

加者は子育て世代や県外からの転勤者など、田舎で自然農法をしたいという方が多く、わざわざ県外からやって来る人もいます。また、参加者の中には、与えられた体験だけでなく、自分で農業を始めてみたいという方も現れしていると話されました。



共同キッチンで作業をする夫妻

令和3年には、県の事業を活用し、交流拠点として古民家をリノベーション(令和4年 11 月完成)しました。

里の隠れ家「さとれが」と名付け、農業体験に来られた方々が、共同キッチンなどを備えた土間スペースとして利用しています。そこで、みちるさんが「ジャムや塩麴、醤油麴、漬物」などの加工品を作り、運営するインターネットのサイトで農産物と一緒に販売しています。

今年は東京丸の内で開催された「NIPPON FOOD SHIFT FES. 東京

2024」の Marche(マルシェ)に出店しました。



●マルシェで野菜を販売する様子

▶ これから

菊地さんは、現在のところ生産規模を拡大するよりも、今の取組をもっと広げ、地域も巻き込み、秋田を活性化していきたいと話されました。



●刈取後の棒掛けをバックに「はいチーズ」

(●印写真:ファームガーデンたそがれ提供)

うんめえ野菜をみなさんへ届けたい！

あきたで生きる～秋田の地域資源を活用し、秋田で暮らし、秋田を活かす取組～



OHANAfarm

(大館市)

工藤 祐次(ゆうじ)

工藤 寿美礼(すみれ)



OHANAfarm

経営概況

OHANA とは、ハワイ語で家族。アットホームな家族経営を目指したい。また、野菜にとって花は重要との思いを込めて命名。
マークは畑の畝と水を表現。

経営面積 | 水田(0.86ha)、畑・ハウス4棟(1.2ha)
作 物 | 水稻(あきたこまち)、野菜(葉物、根菜等)
豆類、いも類、花き等
労 働 力 | 3名 夫婦(生産・加工)、母(漬物加工)
販 売 先 | ECサイト、産地直売所、道の駅、JA 等

大館市で祖父母から農地を受け継ぎ、農薬や化学肥料を使用しない、こだわり野菜を生産・販売している若手ご夫婦がいます。2019 年に屋号を「OHANAfarm」と命名し、小規模ながらも消費者ニーズに応えようと数十種類の野菜や花きの生産の他、漬物等の農産物加工・販売と二人三脚で複合経営にチャレンジしています。

▶ きっかけ

岩手県奥州市出身の祐次さんと大館市出身の寿美礼さんは、岩手県の農業大学校で出会いました。祐次さんは卒業後、地元で野菜農家になるつもりでいたそうです。また、寿美礼さんは、幼い頃から祖父母の農作業の手伝いをしていたことから、自然な流れで将来は、祖父母の後を継いで農家になろうと考えていたそうです。



OHANAfarm の野菜畑

2人は、平成24年に卒業後、寿美礼さん曰く「私が引っ張ってきました。(結婚)」とのことで、寿美礼さんは、ねぎを栽培する祖父母のもとで就農し、祐次さんは、近隣の営農組合で1年間研修し、平成25年に就農しました。当初2人は、慣行での野菜栽培でしたが、お客さんに「こだわりは何ですか？」と問われたことがきっかけで、徐々に農薬や

化学肥料を使用しない栽培方法へ切り替えていきました。令和元年には、屋号を「OHANAfarm」と命名し、農産物の生産・販売等に取り組んでいます。

▶ 取組

特にご夫婦が心血を注いでいるのが、農薬や化学肥料を使用せず栽培している野菜です。消費者のニーズに応えたいとの思いから、ねぎやブロッコリー、トマトをはじめ、四季を通じて葉物、根菜、豆類など数十種類の作物を栽培しています。



数十種類の葉物野菜が作付けされたハウス

農作業の大半は、除草と防虫となることから、2人でも管理可能な栽培面積で、病害虫に強い品種の選定、植え付ける野菜の組み合わせ、防虫ネットの導入など省力化の工夫をしているそうです。

▶ これから

今年、冬期間の収入確保のため、自家野菜での漬物や菓子などを製造する農産物加工所を新設しました。



小規模ながらも機能的な農産物加工所

祐次さんからは、「将来、農薬や化学肥料不使用の野菜を大館市内の消費者が簡単に手に取れるようになり、子供達が普通に食べられるようにしたい。そのためには、まず、収入を確保し、経営を安定させることが大事。その後は、従業員の雇用や法人化など規模拡大できたら。」と将来の夢を語っていただきました。



将来展望を語る工藤夫婦

トマトで地域に活気を与え、より良い産地を目指す！

あきたで生きる～秋田の地域資源を活用し、秋田で暮らし、秋田を活かす取組～



株式会社 細谷農 PROJECT

(大仙市清水)

代表取締役 細谷 亮太(りょうた)

経営概況

経営面積 | 50a(ハウス 18 棟)

作 物 | 夏秋大玉トマト、葉物野菜(冬期間限定)

構 成 員 | 役員1名、社員2名、臨時雇用6名

北海道の大学を卒業後、県外で就職し営業職を経験。平成 27 年、30 歳の節目に帰郷し、指導農業士でもある父親の元でトマトや水稻等の栽培技術を学びました。それまで、農業経験は全くなく、農業知識ゼロからのスタートで、当時は農業への興味も薄かったものの、今はやり甲斐を感じています。

きっかけ

漠然と何らかの経営者になりたいと思っていたものの、手段を見つけられずにいました。帰郷を機に父親の元で農業経験を積むうちに、営農意欲が湧いてきて、「個人事業主細谷農園 PROJECT」を創設し、父からパイプハウス2棟を借用し、トマトの営農をスタートしました。



●収穫前の大玉トマト

取組

夏秋トマトの栽培技術を親元で習得すると同時に、秋田県主催の「次世代農業経営者ビジネス塾」を受講し、将来に向けたビジネスプラン作成など経営管理手法を学び、農業は究極の成果主義だと気づきました。

将来の規模拡大化を見据え、雇用の確保、資材購入や流通面での信用度向上のため、平成 30 年株式会社設立に至りました。

現在は、社員2名のほか臨時雇用6名で、ハウス 18 棟の作業を切り盛りしています。「トマトは今、水分、栄養、それ以外の何を欲しているのか。」と社員にはトマトの観察を徹底するよう指導しています。

令和6年7月の大雨で、排水路のオーバーフローにより、ハウス内が浸水被害に遭い、通常であれば収穫を断念してもおかしくない状況で、1ヵ月以上かけてリカバリーし、どうにか 10 月の最終出荷にこぎつけました。



資材ハウス前にて

平成3年度に地域のリーダーとしての活躍が認められ、将来の農林水産業を担うことが期待される若手を表彰する「大仙市農業元気賞」を受賞し、また、令和6年度に第 147 回秋田県種苗交換会トマトの部にて秋田県知事賞を受賞しました。



養液土耕栽培の点滴灌水システム

これから

社員のうち、令和6年度に1名が独立就農し、来年度も1名が独立を予定しています。これからも、地域雇用を生み出すため、研修生を社員として受け入れ、トマトのプロを育成し、トマト栽培で地域に活気を与え、より良い産地を目指したいと考えています。

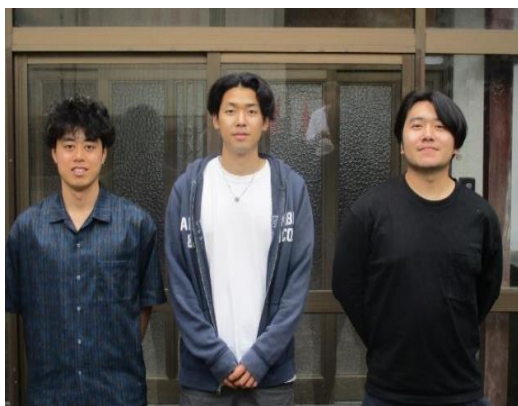


ハウス内の様子

(●印写真: 細谷農 PROJECT 提供)

にかほ市横岡集落から田舎の魅力を発信中！

あきたで生きる～地域おこし協力隊を卒業後、地域の良さを知り移住し、地域と関わり奮闘する取組～



株式会社 Ventos(ベントス)

(にかほ市)

代表取締役 中山 功大(なかやま こうだい)

取締役 笠間 怜(かさま れん)

取締役 横山 豊(よこやま ゆたか)

事業概況

観光事業開発、「ゲストハウス麓[Rokumasu]」の運営、地域のイベントへの出店、地域の食材を使った加工食品の開発・販売及び農村 RMO「麓のカラコ協議会」の事務局



Ventos(ベントス)ig

にかほ市の地域おこし協力隊に就いたことがきっかけで横岡集落に移住し、にかほ市の地域資源を活用した観光を企画し地域を元気にする団体「Ventos(ベントス)」を立ち上げた若者達があります。彼らは「ゲストハウス麓[Rokumasu]」を拠点に活動しており、農水省の「デジ活」中山間地域に登録された「にかほ市横岡・船岡地区」の取組にも携わっています。

▶ きっかけ

東京都出身の中山氏と笠間氏は、大学生のころ、共通の友人を通じて知り合いとなり、その後、にかほ市の地域おこし協力隊として移住しました。任期中に同市の担当者の紹介で、そば生産組合の代表と会い、初対面でも気さくにそば打ち体験をさせてくれた人柄に感動しました。もとより、にかほ市に、何でもある都会とは違う魅力を感じ「都会出身者に田舎での生活の豊かさを体感してもらい、自分の田舎をつくる価値を提供する。」をコンセプトのもと立ち上げました。

令和6年4月には、ゲストハウスの宿泊客だった千葉県出身の横山氏が新たに加わり現在3人で活動しています。



開業した「ゲストハウス麓[Rokumasu]」

▶ 取組

令和5年5月に開業した「ゲストハウス麓[Rokumasu]」は、地域の空き古民家を借りて、地域住民やSNSで

募った協力者と共に改装しました。

宿泊客に対し、田植えや野菜の収穫などの農業体験、近くの海での漁業やサップ体験、集落近くのカラコ(河原)での水遊びやテントサウナと天然水風呂などを観光の目玉として、ディープな田舎暮らしを提供しています。



田植えを体験する都会からの宿泊客と地域の子供たち

また、横岡集落の郷土芸能である「鳥海山日立舞横岡番楽」の担い手不足を知り、ゲストハウスの宿泊プランとして「番楽の舞い体験」を企画し、令和6年には都会の大学生が、番楽保存会員から舞いを教わり、地域のお祭りで実際に番楽の舞いを披露しました。

ほかに「地域食材を使用したクラフトコーラ」、「そばの実入り炊き込みご飯(蕎麦舞)」など、地域資源を利用した商品開発を進めており、蕎麦舞は2月末頃にリリースを予定しています。情報の発信は Instagram で行う予定です。

今後は、ゲストハウスの敷地にある作業小屋を改修して加工所を造り、本格的に製造を始める予定です。



そばの実入り炊き込みご飯(商品名「蕎麦舞」)

▶ これから

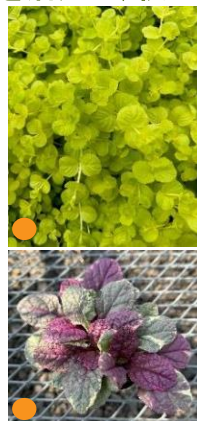
Ventos は、農業への参入も進めています。農村 RMO「麓のカラコ協議会」の事務局も担い、デジ活の支援策を活用して、農作業の省力化に向けたデジタルマップ作り、ドローンの活用や自動給水栓導入等の実証を行うなど地域農業の課題解消を目指しています。

中山氏は、「今後も地域の魅力を発信し続け、移住者も農業で稼げるような環境づくりをしたい。」と話していました。

(写真: Ventos 提供)

半農半Xを目指す若手経営者、現在奮闘中！

あきたで生きる～秋田の地域資源を活用し、秋田で暮らし、秋田を活かす取組～



山本農園
(山本郡三種町)
代表 坂本 永遠(とわ)



山本農園

経営概況

経営面積 | ガラス温室:0.2a、畑:5a
作物 | 花卉(カラーリーフの苗、アスター、百日草等)
構成員 | 1名(本人)
販売先 | 産地直売所「じゅんさいの館」、ネット通販等

みなさん「カラーリーフ」はご存じでしょうか？主に花壇や鉢花の寄せ植え等に用いられ、銅葉や斑入り、黄葉、銀葉等色とりどりの色彩をもった植物です。このカラーリーフの苗を生産から販売までをたった1人で行う21歳の若手生産者、坂本永遠さんが経営する「山本農園」が開園して2年目を迎えました。

▶ きっかけ

三種町出身の坂本さんは、幼い頃から祖母の畑仕事を手伝うことが好きだったこともあり、農業全般を学ぶことができる能代科学技術高校に進学しました。在学中は、農作物の生産をはじめ、最先端のスマート農業やインターネット通販での農作物販売等について学びました。卒業後の令和4年4月に、地元で植物を生産、販売する会社に就職しましたが、働くうちに「自分のやり方で、好きな植物を生産して販売してみたい。」との思いが強くなり、令和6年1月に「山本農園」を開園しました。(名称は、自身が暮らす地域名の「山本地域」からつけたそうです。)



山本農園ガラス温室

▶ 取組

開園にあたっては、カラーリーフ苗専門の生産・販売業と決め、極力経費

を掛けず、1人でも事業が展開できるよう、自宅敷地内に小規模なガラス温室を建てて生産を開始しました。約20種類のカラーリーフ苗を春と秋、年2回の販売に合わせて生産しています。栽培技術については、これまでの経験と、持ち前の探求心をいかし、インターネット等から、日々、情報収集しているそうです。



ガラス温室内で育つカラーリーフの苗

販売当初は、「誰も買わないのでは・・・。」「本当に売れるのだろうか？」と疑心暗鬼だったそうですが、SNS等の口コミがきっかけで問い合わせや反響があり、自分でもびっくりしているとのこと。購入者の中には、「買って良かった。」「すごく立派できれいな苗で感動した。」と言ってくれる人がいて、嬉しかったそうです。また、カラーリーフ苗の販売だけでは収益の確保が厳しいと

考え、自宅敷地内の畑でお盆用の切り花(アスター等)の生産をしています。産地直売所での売れ行きも好調で、大きな収入源となっているそうです。



生育状況を確認しながら作業する坂本さん

▶ これから

今後は、品質を落とすことなく1人で管理できる範囲で、規模拡大を検討しています。また、冬場の収益確保が課題となっていることから、将来、半農半Xも視野に行政書士等、得意な法律分野の資格取得に向け勉強しているそうです。坂本さんは、「農業だけに捉われず、幅広く、興味のある事に挑戦していきたい。資格を取得すれば、自身はもとより地域農業者の力になれると思う。」と話してくださいました。

(●印写真: 山本農園提供)

横手の担い手として、農業の発展に尽力！

あきたで生きる～秋田の地域資源を活用し、秋田で暮らし、秋田を活かす取組～



農事組合法人 新東北AGRAS
(横手市横手)

代表理事 林 龍太郎

経営概況

経営面積 | 水稲:16ha 大豆:2ha すいか:1.6ha
| WCS 作業受託:30ha

構 成 員 | 役員3名、社員2名、臨時雇用4名

同級生2人と令和2年5月に農事組合法人を設立した林 龍太郎さん。横手市名産のすいか「あきた夏丸」や「あきた夏丸チッチェ」、水稲、大豆栽培のほかWCS等の作業受託も行っています。先輩農業者から助言を受けながら地域に溶け込み、法人の評判が口コミで広がっており、地域の担い手として活躍しています。

▶ きっかけ

横手市出身ですが、農業とは縁のない環境で育ち、首都圏で会社員として働いていました。地元で起業したいと考え帰郷し、畜産農家ででのアルバイトで農業に魅力を感じ、横手市が運営する「よこて農業創生大学校」で2年間研修を受けました。

専攻作物には、初期投資を抑えつつ、収益が見込める地元名産の「すいか」を選定し、栽培技術を習得しました。



●すいかの定植準備作業

▶ 取組

就農時は、農地も農機も無いため、市やJAに相談し、近隣の農業法人から農地を借り受け、国や県、市の補助事業を活用し、当面必要な農機を揃えました。

すいかは、地域の先輩農業者から管理作業の助言を受けたり、研修会に積極的に参加し、高品質かつ収穫量安定に向け栽培技術を磨いています。

また、就農を目指す若手農業者からの相談には、一緒に作業をしながらアドバイスを行っています。



●すいかの管理作業

水稲、大豆栽培のほか、WCS等の作業受託も行っており「知らない若者達が何かやっている。」から「あの若者達に作業をお願いしたい。」と頼られる存在となるよう、丁寧な作業を心掛けています。その評判が広がり、年々経営面積が増え、広域で営農を行うようになりました。



●たい肥散布作業

初期投資抑制のため、現在は、コンバインや乾燥調製施設は所有せず、

近隣の農業法人から借用し、繁忙時は協力しながら効率的な作業を行っています。



●収穫したすいか

▶これから

目指す姿をイメージし、法人名を農業(Agriculture)とIT用語RAS※から「新東北AGRAS(アグラス)」としました。作業依頼は可能な限り引き受け、地域の農地を守り、担い手として農業をさらに発展させたいと考えています。

今後は、酒米栽培や乾燥調製施設等の整備のほか、休耕地の有効利用のために試験栽培した「かんしょ」に手応えを感じ、作付けを検討しています。

※RAS とは、コンピューターシステムを評価する3項目の要素の頭文字をつなぎ合わせた用語。

Reliability(信頼性)
Availability(可用性)
Serviceability(保守性)

(●印写真:農事組合法人新東北AGRAS提供)



みどりの食料
システム戦略
あなたのeatが
地球のeコトに

発行：東北農政局秋田県拠点地方参事官室

住所：秋田市山王 7-1-5

TEL：018-862-5611

令和7年4月作成